

新生讃美歌と私

～新生讃美歌50年のあゆみから～

第10回 「新生の歌」

寺園喜基

『新生讃美歌』第三次編集委員

私がバプテスマを受けてクリスチャンになったのは、1956年の高校2年生のときでした。そして、『新生讃美歌』が出版されたのは翌年の1957年です。そのころ教会では、特別集会・伝道集会が年に1回か2回は開かれていましたが、そのときにはこの新生讃美歌が、わたしの鹿児島教会でも、用いられていました。少し甘くてバターの匂いのするような感じの多くの曲は、礼拝で使用されていた『教団讃美歌』とは違って、高校生には魅力的でした。

高校を卒業し神学校に入学して4年間、福岡教会で神学生時代を過ごしましたが、そのころも特伝ではこの新生讃美歌が歌われていました。それに当時は連盟の新生運動の時代でもありましたから、「新生讃美歌は新生運動の歌」として、信仰決心へのうながしの歌というように受け止めました。歌は神の呼びかけに対する人間の応答、信仰とバプテスマへの決断、新生の喜びと献身などが、中心にあることが感じられました。

この当時の印象は、現行の『新生讃美歌』（2003）においても色濃く残っており、むしろこの讃美歌集の特徴と言ってもいいように思います。すなわち、神を神自身として賛美という面よりも、人間の信仰という側面が強調されているということです。

神賛美というとき、二つの側面があると思います。一つは、神を賛美することであり、これは神が神であることが素晴らしいという、「神ご自身としての神」（デウス・プロ・セ）を称賛する歌という意味です。二つ目は、これに対して、「私達にとっての神」（デウス・プロ・ノービス）、「私にとっての神」（デウス・プロ・メ）、神との関係、神の働きかけ、神存在の意義を強調するという側面です。すなわち、人間の信仰の強調です。

ルターの高弟メランヒトン「キリストを知ることは彼の恵みを知ることである」と言っていますが、キリストについての客観的認識（それ自体としてのキリストご自

 ~ 新生讃美歌のあゆみ ~

日本バプテスト連盟創立	1947年
「新生讃美歌」	1957年
「新生讃美歌」	1963年
「新生讃美歌」改訂版	1966年
「新生讃美歌」	1982年
「新生讃美歌」	1984年
「新生讃美歌」	1989年
「新生讃美歌増補」	1997年
「新生讃美歌増補」	1999年
「新生讃美歌」改訂版	2003年

身)と主観的認識(キリストとわたしの関係)とは一枚のコインの両面をなしています。もともとバプテスト主義は近代の敬虔主義(ピエティズム)の運動の一環をなすものであり、「救いの確信」を求めた運動であり、主観的認識を強調してきましたから、讃美歌においても人間的側面、人間の内面性が強調されることは自然のことだと思います。

以上のことは現行の『新生讃美歌』においても当てはまっています。現行の『新生讃美歌』では、曲が5つの大項目に分類されています。それは()礼拝、()神の働き、()教会の働き、()新生、()応唱です。この内で、曲数が最も多いのは「()新生」で、全体のおよそ三分の一を占めています。大項目「新生」はさらに中項目「信仰生活」と「応答」に分類され、これはさらにまた詳しく、信仰への招きから新生者としてのキリスト者の生き方というような、小項目へと分類されています。大項目の「新生」の曲数が最も多いという

ことは、ここに強調があるということであり、それは神賛美において人間の主観的側面に強調があるということを示しています。

ときどき、「『新生讃美歌』には神学がない」とか、「これにはバプテスト主義が出ていない」、という声を聞きます。はたして、そうでしょうか。そういう人は、神学とかバプテスト主義をあまりにも狭く理解しているのではないのでしょうか。神の語りに人間が応え、神の働きかけに人間が従うとき、そして、その応答・服従が歌で表現される、その歌は「新生の歌」ということができます。また、神に感謝し、喜び、哀訴し、懺悔し、そして回心し、新生を歩みだすとき、すなわち神は私に大いなることをしてくださったと歌うとき、その歌で人間の側の信仰的側面が表白されているということができません。このことは、私達がまさしく、バプテスト主義の良き神学と伝統の中にいるということを示していないのでしょうか。

(西南学院理事長・院長)

8番 「主の呼びかけに」 作者クルト・ロンメルについて

クルト・ロンメルは、戦前戦中という時代の中で学生時代をおくりました。大学入学試験の後に徴兵され、恐怖を耐え忍ぶ体験の中、終戦の年を迎えます。1945年にフランスで捕虜となった彼は、モンペリエの捕虜収容施設で神学を学ぶという大きな幸運に恵まれます。1947年に釈放された後、チュービンゲンとハイデルベルクで学びを続け、1951年に最初の神学の試験を受けません。バイヤースブロンとシェーンアイヒで、牧師補を勤めた後、1953年に2回目の資格試験を受け、1954年まで牧師補として働きました。後にフリードリヒスハーフェンとバートカンシュタット及びシュベニンゲンで牧師となります。彼は、牧師職に加えて、青少年伝道と音楽・文化教育の分野に従事しました。その後、1956年～60年に、ラーベンスブルグの地区青少年担当の牧師として働き、1963年にドイツ都市青少年担当牧師協議会の議長となります。同時期にドイツプロテスタントの青年の音楽・文化教育委員会の一員として働きました。彼は若いキリスト者との関わりを通して、若者には両親とは別に、対話する相手が必要であることに気づきました。このことを多くの著作に記しています。

出典：Komponisten und Liederdichter des Evangelischen Gesangbuchs

訳：富田詩生（横須賀長沢教会）

645番 「すべてをくださる恵みの神」

田中 恵（田隈教会）

1966年の夏、アメリカ ノースキャロライナ州リッジレスト・バプテスト・アッセンブリーに於いて、バプテスト・ユース・カンファレンス（ユースキャンプ）が行われました。そのテーマ“God's World Today”に即して、講師であったエド・シーバウ（Ed Seabough, 1932 - ）がプログラム委員会の求めに応じて、その年の早春に作詞したものです。現代の日本でも、隔年で全国少年少女大会が天城山荘で行なわれ、そのテーマソングが作られています。それと同じような感じですね。当時エド・シーバウはユース世代から非常に支持されていたメッセンジャーでした。英語で書かれた原歌詞は、各節の最後を“my place in God's world today.（今日あなたの世界に、私の役割を...）”と結んでいます。1966年のアメリカといえばベトナム戦争の頃...。若い参加者たちはどのような思いで讚美したのでしょうか。

曲のEL DORADOはウィリアム・J・レイノルズ（William J. Reynolds）がこの詞のために同年作曲しました。シーバウからの作曲依頼を受けた時、彼は第一バプテスト教会で行われる伝道集会の賛美リードのために、アーカンソー州エル・ドラード（El Dorado）にちょうど到着したところでした。滞在中に作曲したとのことで、曲名はそこに由来しています。また、心を一つにして、一致して讚美することを大切にしていたシーバウは「ユニゾンの曲にするように」という注文をつけていたといえます。

この讚美歌の「今日神様の世界で、私の果たすべき役割を...」という献身の祈りは、混迷を深める現代の私たちにも力強いメッセージとなって語りかけてきます。